萩原慧さんを偲ぶ

ぐんま教育文化フォーラムの前身である群馬県高校教育研究所の設立以来、群馬県の教育研究活動を牽引してこられた萩原慧さんが昨年 12 月にお亡くなりになりました。87 歳でした。

弔　辞

先生の訃報に接し､一瞬呆然として､そして、深い喪失感に襲われました。

私が大学を卒業し、高校の教師としてスタートした時、既に先生は１６年の経験を積んで、中堅として活躍されていました。同じ職場になったことはないのに、先生には親近感をもっていました。それは、組合活動を通して「まがったことは大嫌い｡常に弱い立場の側に身をおき、世の中の理非曲直を示すことに情熱を傾ける」姿に惹かれたからです。

群馬の子どもたちのため、教職員のために全身全霊を打ちこんで、どのくらい粘り強く活動してこられたことか。それはたくさんの人達が見聞きし、知っています。何年か前、大の親友で苦労を共にしてきた岡田信次さんが亡くなった時は、ガックリと力を落とされていました。でも､「大丈夫だろうか？」との周囲の心配をよそに、先生は不死鳥のように立ち上がり、前にも増して真剣に力強く、教育や社会運動に取り組まれました。

このような形で先生とお別れするのは誠につらいことですが、誠実にたくましく生きてこられた先生の記憶は私たちの胸に刻まれています。

天国で岡田信次さんと共に､｢みんな頑張れよ。お手並を拝見しているよ」と、ずっと見守ってくださるような気がします。

永いことお疲れさまでした。ありがとうございました。

２０２０年１２月１６日

金井秀行

内 省 の ひ と

2020 年 12 月、萩原慧さんが旅立った。まだ 90 前だからもっと長生きして、劣化する世の中に活を入れ続けてほしかったとしみじみ思う。16 日の告別式に参列した。時勢柄か流れ焼香だったが立ち去りがたい参列者が多く、私もその一人だった。残るべきか残らざるものかと思い惑ったが、想いを残して帰途に就いた。時流に棹さす自分がそこにいた。いまも悔やまれている。

萩原さんは私の現職時代、高教組の委員長であり、社会科教研の先輩でもあったが、特に多大な教えをいただいたのは教育文化フォーラムの前身、高校教育研究所で制度政策部に属してからだった。

『日本の思想』(丸山)『教育と教育政策』(宗像）の輪読会、三春小学校や犬山市教育委員会の視察・研修旅行、中でも 2004 年 8 月 25・26 日両日、札幌市の北海学園大学で開かれた第 63 回日本教育学会での発表は忘れられない思い出である。24 日新潟発のフェリーで 1 泊、早朝小樽へ着き、会場へ。「地域における教師のライフヒストリーの掘り起こしの試み」と題して問題提起を行った。なぜ、オーラルによる教師のライフヒストリーに取り組んだか。萩原先生は三つの視点を提起した。一つは、権力の進める教育政策に翻弄される戦後教育はそんなに脆弱なものだったのかという問い。二つ目には、教育

第 63 回日本教育学会にて(2004)

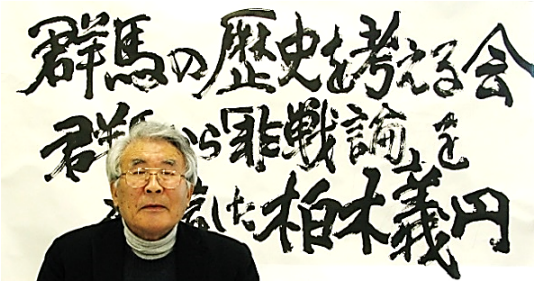
史には教師の生きた姿がなく、自分が教師として生きてきた意味を問い直したいという思い。三つ目は、国民学校初等科６年時、朝礼で読み上げた綴り方「あゝ神風特別攻撃隊」（昭和十九年教育勅語下賜記念日）の軍国優等生少国民の「私」と、旧制中学から新制高校に変わり自由を謳歌して育った「私」は、しかしながら友人Ｓに「お前の性根は少しも変わっていない」と言われたことに端を発して、戦前・戦中と戦後教育は変わったのか、変わらなかったのか、高校の教員として民主教育に邁進し、組合活動に熱中した「私」はどうだったのかを問い続けることで、今まで生きてきた意味を見出したいという願い。これら三つの視点に対する学会参加者の反響は、期待以上のものだった。

この学会には、当時ヤンキー先生で一躍有名になった義家氏の特別講演も予定されていたが、ドタキャン。組合員の同僚が代理講演を行った。その曖昧な理由におやっと思ったが、今はよく分かる。生徒に“希望の星”と言わせ、「日の丸・君が代」強制に反対した彼は、今や自民の衆院議員。モリカケ問題を一点の曇りもないと擁護し、いじめ問題、不登校、学力低下、若者の年金未納などのすべての諸悪の根源は日教組と戦後教育にあると嘯く。

ヤンキーは右翼との親和性が高いと言われるが、山谷えり子や杉田水脈と同類の腐臭を感じるのは私だけではないだろう。

函館湯の川で１泊、フェリーで大間にわたり、恐山に。午後、八戸へ向かう。３時間もあればと思っていたが、八甲田越えは数メートル先しか見えない濃霧、前を走る軽トラのバックランプだけが頼り、ノロノロ運転の結果やっと夕方遅く到着、宿泊。“生きてる心地がしなかった”とは優等生萩原の後日談。三陸海岸を仙台まで南下、東北道経由で帰路についた。総延長何キロになるのだろうか、４泊５日の長旅だった。

高崎五万石騒動義人祭にて(2017)



平野・萩原・橋本三人のおしゃべりを活字に起せば数万字をはるかに超えるだろう。

さて、最後に教師のライフヒストリーについて。2003 年 6 月に始まった“市民学習会　戦後教育史を学ぶ”は 2007 年 6 月に終了するまでほぼ毎月行われ、全 62 回を数えた。平野和弘高崎健康福祉大学教授による戦後教育のトピック解説と、主に群馬の小中高の現職・退職教師のオーラルヒストリーを隔月交代で開催した。会場は総合福祉会館や教育会館を利用、一般公開で行い、当日の報告や話し合いの模様を全文活字にした報告集（A4 判 30～40 頁）を参加者、会員、公共機関などに毎月 400 部発送した。また、３年間は年報も発行した。この平野研究には科研費がついた。

ライフヒストリーを語ってくださった教師は３０余名に達したが、その大部分は萩原先生の人脈と尽力によるものだった。いま、そのいくつかを読み返しているが、エピソードの面白さと言い、質の高い実践といい、よくもまあここまでの記録が残せたものだと驚くしかないが、萩原先生の執念の結晶なのだと今更ながらに思うのである。“教え子を戦場に送らない”“権力の走狗にはならない”“こどもに全面発達を保障する”教師には、これだけの実践があり、民間教育研究の実績がある。

しかし現実に目を向けると、萩原先生の危惧した組合破壊、戦後教育の清算は進行し、今日、ついに日本学術会議攻撃にまで至った。

いま、閻魔大王に「萩原慧の『教師のライフヒストリー続編』」を語りながら、“瀧さん、フォーラムのみなさん!!、この者どもを懲らしめてやりなさい！”と、あの真面目な顔で命じているに違いない。

２０２１年元旦

橋本寛文記